

〔資料紹介〕

『間拍子舞』の翻刻と解題

小田幸子

凡 解  
例 題  
『間  
拍子舞』

## 解題

本稿は、山本東次郎家所蔵の『間拍子舞』と題する狂言伝書の翻印である。原本は、縦176mm、横156mmの枡型本で、帖装に綴じる。濃紺表紙。表紙左上の題簽に「間拍子舞」と太字で題記し、下に小さく「十二之内、舞十二、三十一」と注記する。料紙は交漉紙。本文墨付き五十五丁。第一丁は、所収曲名を横三行書（裏面は二行目の途中で終了）に列記する。曲名目録のうち「鳥の舞」は本文では「鶉舞」と題している。本文は片面九字書が基準で、曲の変わり目は二行分ほどあける。朱筆と墨筆による加筆・補記があり、役の交代を示す朱の「印」、曲名上に朱の「印」を施す。また、動きや演出に関する記述は、曲名下や行間に小字で書くことが多いが、この書式で統一しているわけではない。絵図は〈俊寛〉の舟の図のみ（図版参照）。最終丁に本文と同筆で「右間之本代々相傳之内委細清濁仕書付申者也。大藏弥太郎虎時」と識語があり、花押と二種類の朱印を押す（図版参照）。筆跡・花押や伝来の状況から大藏虎明自筆の伝書と判断される。

内容は、三十二番の間狂言台本（〈水無瀬〉が重複しており、実数は三十一番）と十二番の囃子舞の詞章を記述したものである。題記の「間拍子舞」は、間狂言と囃子舞の意味であろう。「拍子舞」は「ハヤシマイ」と読んでおく。間狂言には仕方や演出上の注記も散見する。

虎明関係の伝書のうち本書と特に関わり深いのが、寛永十九年の年記をもち、「大倉氏虎明（花押）」と署名する『萬集類』である。すなわち、同書には、本書所収の十二番の囃子舞すべてが含まれており、詞章もほぼ同一である。ただし、「酒の舞」だけは、『萬集類』では「酒のかうしき」と題し、本文も多少相違している。なお、同書には三八番ほどの間狂言に関する記事もあるが、本書の所収曲とは一曲も重ならない。

虎明の間狂言伝書としては、寛永十二・三年に著した、註釈付きの間狂言台本『間之本』（四冊）がある。その所収曲八十七番のうち、本書と重なるのは〈降魔〉一番のみで、しかも、内容が全く違う。釈迦の出生から語りおこす本書のものは、途中で中断しており、当時の間狂言台本の流動性をうかがわせる。

ところで、本書題簽の「十二之内」という記述は、もと十二冊でひとまとまりの伝書群が存在したことを思わせ、その一冊と考えられる間狂言台本が東次郎家に伝来している。『間之本』と題する一冊がそれで、同じく題簽に「十二之内」とあり、〈春日龍神〉ほか六番を所収する。所収曲は本書と重ならない。書体をはじめ、奥書の文言も署名・花押・朱印も本書のものと同一で、書式も近似しており、本書と兄弟関係にあることは疑いない。寛永六年六月十三日に江戸城西之丸に於いて喜多七太夫が〈望月〉を上演した時の記事、同じく八月二十五日同人が〈石橋〉を上演した記事があり（本文と同筆）、成立年代推測の手がかりを与える。兄弟関係にある本書も含め、寛永六年からさほど降らない頃の執筆とみてよからう。寛永十二・十三年奥書の『間之本』と本書の先後関係は明確ではないが、整理の進んだ『間之本』よりも、本書の方が先に成立していた蓋然性が高いのではないだろうか。虎明が虎時と称した時期も勘案して、本書の成立を寛永十年前後と一応考えておきたい。なお、『芸能の科学28』に翻刻した、東次郎家蔵『代伝抄』前半部分の識語の署名・花押も、『間之本』『間拍子舞』の二冊と同一である。

本書のほかにも間狂言台本が存在していたことは、〈降魔〉の「よの本二有」の注記や〈大原御幸〉の「珍敷間の本ノ内二有」などの注記から知られるが、「よの本」や「珍しき間の本」が具体的に何をさすのかなど、詳細は不詳である。これらのことも含め、虎明が関係した間狂言台本の全体像については、今後の課題としたい。

江戸時代のまとまった間狂言台本は現在のとこと寛永十二・十三年の『間之本』が最初であり、その欠を補う意味でも、本書は貴重である。とくに、稀曲のセリフが知られるのは有りがたい。間狂言のみならず、能作品の理解に寄与するところが甚大であろう。

## 凡 例

原本を忠実に翻印することを原則としたが、読みやすさと印刷の制約を考慮し、次のような方針に従った。

- 一、漢字・平仮名・片仮名の区別、および仮名遣い・送り仮名は原本のままとした。
- 一、漢字の旧字体・異体字は通行のものに改めたが、「龍」など若干は原本のままとした。
- 一、濁点・句読点を加えた。原本の濁点・句読点は、漢字に付されているもの以外は生かしたが、校訂者の補ったものと区別していない。
- 一、場面が大きく改まる箇所など、適宜段落をたてた。
- 一、仕方に関する注記など、セリフ以外の卜書的部分は、原本の文字の大小にかかわらず、すべて小活字で組んだ。
- 一、朱筆による書込・注記の類は、役名をのぞき、へで囲んだ。墨筆による本文訂正は（ ）で囲み、しかるべき箇所に移した。振り仮名は、文字の右に傍記した。
- 一、原本には、役名交代を示す朱の\印、役名、曲名上の∴印・印が施されている。これらは翻刻に生かしたが、朱墨の区別はしていない。また、役名交代以外の\印は省略し、印なしに役が変わっている際には\印を補った。
- 一、曲名上の注記は、曲名下に移した。
- 一、脱字を補い、極端な宛字には正しい文字を宛て、訂正困難な箇所はママとした。平仮名書きで意味がとりにくい場合など、漢字を宛てたところもある。それらの校訂者による注記の類は（ ）で囲んだ。
- 一、判読不能な文字には□を宛てた。

間  
拍子舞

十二之内  
舞十二  
三十一

高野敦盛	地引	桜間	らうぎわう	比良	龍虎	たてを	くわいめい	たいせ太子	はんごんかう
／＼筆の舞	／＼鳥の舞	ふじ	しゝ	野口	せきはら	／＼がうま	鷺	／＼さい	／＼みなせ
／＼打たる舞	／＼松の舞	／＼引たる舞	／＼酒の舞	／＼つるの舞	／＼舟の舞	／＼月の舞	／＼皇 <sup>題</sup> の舞	／＼菊の舞	／＼貝の舞

春近	元服曾我	俊寛	大原御幸	太木	木賊	岡崎	みなせ	身売	俊成忠則	初雪
								エボシヲリ	サウシアライ	アヤノツヅミ

…はんごんかう 次第・さし過ぎて、かハづの宿につき、やどかる。

たれにて渡り候ぞ があるじに其由申さうずるにて候 いかにも申候、旅人の渡り候が、お宿と申され候

おくの間へ御通り候へ ていしゆつ、ミ打のそばへ行いる。女、座になをり、風のこちのよしいふ。

扱、きやうげんいで、ひとり事に いや只今の女性の風のこち、以ての外と見え給ひて候、此由ていしゆに申さう

其由いふ。しかくありて、女しする。爰にて笠をく。

わき いかにもたれかある

間 御前に候

森の僧ノ方へヨくり、

けうよう申候へ 間 かしこまつて候

…たいせたいし 中入、あとしら波と成にけりく

罷出たる物ハ、天ぢくはらない国の御門、太世太子に仕へ奉る者にて候。扱も此君、国土のたみのひんなる事をかなしミ給ひ、ぼんでんにきせいし給ふ。其時龍宮のたから、によいほうじゆを太子にあたへ給ふ。則宮中に納給へバ、七ちん万宝ミちくたる御事にて御ざ候。やがて辻々に高札をたて、たからをたみに御あたへ候へバ、女一人来り、我たからの望ならず、によいほうじゆをひとめおがませ給へと申。いやく宮中ふかく納りたり、それハかなふまじきと仰候。其時彼女申やう、のぞミをかなへ給はん事いつハリなり、おがまんと申。さすがりんげんいで、ふたたびかへらず、玉をおがませ給ふ。彼女けしきかわりて、玉をぬすみて、龍宮にかへりぬ。然バ、ぼんでんたいしやくをともない、龍宮を御したがへ有べきとの御事にて候。其分心得候へく

へはじめのあひしらい、ワキなおり、よび出し、云付る。

かしこまつて候。皆々うけ給候へ、ひんなるたみにたからをあた



へ給ふべきとの御事なり。いそゐでまいられ候へく

…会 盟 〈はじめいひたて〉

かやうに候者ハ、もろこし、しんの国のていわうに仕へ申くわんにんにて候。さる程に、りんごくに、てうわうと申て御ぎ候。然バ、しんわうより、くわいめい有べきとのちよくしをたてられ候処に、今日互に国のさかいへ御幸有て、御しゆえん有べきとの御事にて候。此むね相心得候へく

ワキ いかたれか有 間 御前に候 ワキ へてうわう御幸あらバ、御殿にうつし候へ 間 かしこまつて候  
てうわうの臣下 へ いかにか案内申候 へ たれにて渡り候ぞ へ てうわうの御幸にて候 へ やがて御殿へ御うつし候  
へ 〈うたひくわんぎよなりしもことわりやく 中入〉

扱々めでたき御事の候。日比御望に思召す所の、てうへきの玉、御所望候処に、てうわうやすくと御出し候事、君の御よろこび以外の外の御事にて候。則此所をだいりとなされ、しばらく御とうりうあつて、てうこくまで御したがへ有べきとの御事なれば、たミはくせいに至るまで、そせうの事あらバ、いそぎ罷出、そもん申候へ。其分心得候へく  
〈あんない申候〉 へ たれにて渡り候ぞ へ しばらく御待候へ、其由申上ずるにて候 へ いかにか申上候、てうわうの臣下、りんしやうと申者、玉のきづを申あげん為にて、只今さんだい申て候

…たてを 〈は、ハすこくミをくりて、なくより外のことはなしく 中入〉

皆々うけ給ハリ候へ。我ら御しう、きくち殿と嶋津がたと、一旦のこうろんのあげくに、大けん花(道)になり、嶋津方

をおふぜい打とりて候。其事嶋津殿きゝ候て、たせいをもつて只今此方へよせ来り候事一定に候。此方にをびたゝし御用意にて候。爰にせうしなる事の候。それをいかにと申に、きく地殿御兄弟、藤左衛門殿と申ハ、御さんけいにて、たぎやうにて候が、御しそくに千若殿と申ておさなき御若子の候が、皆々御内の者を御つれ候て、此度のかつせんに御出候ハんと仰られ候を、御内のおとな、たてを、色々御とめ候へども、御せういへんなく候。其上、御母子様へ申、しゆくゝ御とめ候へども、中々御同心なく、をさあけれど物も、ぶへんの家のとうりやう程あるぞ、終に御出候よしきわまり申、けつく御かミさまよりも御重代の御太刀、千若殿へ御つかわし候。此度の事にて候間、きく地殿の御内の者ども、おとこなミ、上は六十、下ハ十二三をかぎり、一人ものこらず罷出候へ、其分心得候へく

∴ 龍 虎 〈中入うたひ、家ちをさしてかへりけりく〉

へらんじやうへ是ハ此あたりにすむ仙人にて候。爰におもしろき事の候。りやうかうのたゝかいの候が、人間のいせいをあらそい申やうにかわる事なく候。けだものと申ながら、いづれの儀くらい高き物にて候。きんりやうくもをうがつてハ、もふこゑんさんの風を出すと申ならハし候。雲井にすめバ龍虎をおり付、てんしの御かほ、りやうがんとたとへ、御のり物を龍がと申。又虎といふ物ハ、竹の中をすミかとする事候。其内のきよき物にて、千色のかげなど、申、常祝じょうじゆしたる物也。仏法のあきらかなる事をして、羅かんにつかへ、ちすいの内にもいる。龍ぎんずれば雲をこり、虎うそふけバ風生かぜせつとも申ならハし候。けだ物の中にて、いづれも位たかき物にて候。是二つのけだ物と申ハ、月花のごとく、いづれもせうれつあるまじきへものと、我が身の聞及たるハ、如此にて候が以下一行ほど抹消。やがてたゝかいが始るぞ。皆々見候へ、其分心得候へく

…ひら

御前に候 畏て候。 橋ようがい、きびしきかまへにて候。いそぎかへり此由申上へげ申ずるにて候

いかに申上候 国久がようがいをミてまいりて候。ほりをほりまわし、橋をかけ一段よきかまへにて候。いまだよ  
うじんずるていとハ見え候

わる女 わらハ、はまのしやうじが下女にて候。ゑ川殿へいそぎの用の事候間、只今参候 いかに此内にゑ川殿  
の御ぎ候か わらハ、はまのしやうじが下女にて候。夕べ、のうしう、ゆるぎの山伏立、大ぜいしやうじが所  
へ御付候。其外にちご山伏の御ぎ候が、国久ハおやかたきなれば、打申度由申され候が、せんだちハ、御同心なく  
候ひしが、同行立ハ、皆々御同心なされたるやうに見へ候が、よにまぎれ、しやうじが所を御立候。是ハ大事の御事  
にて候程に、しらせ申さんためまいりて候 畏て候 まへかどのごとくにて候 畏て候 いかにゑ  
川殿へ申候。かまいてわらハが申たるとハ御申候な

…らうぎわう

御前に候 畏て候 たれにて渡り候ぞ 何とぎわうごせにて候が、たいめん有たきよし被仰候か。そ

うじてめしうどにたいめんハきんぜいにて候へども、ぎわうと申御かたハ、舞の上手とき、申て候間、それがし心得  
を以て引合せうずる間、まいをもしろうまい候へ いかにぎわうへ申候。さいぜんまいをまわふと仰候程に、  
引合候処に、何とてをそく候ぞ。いそぎまい候へ。

〈うたひに、のちの世たすけおハしませく〉 いや、べつなる事にも候ハぬ。ぎわうと名乗、たいめんのよし申候程に、  
 きんぜいのよし申て候へバ、舞をおもしろ(ふ) まふて見せんとの事で御ざつた。それがしが心得、あわせ候へバ、  
 今ハ舞をま(マ)ふまひよし被仰候 一天四海波をまふ

∴ちびき

／＼きたか／＼。あゝぬかつた物じやな。かたつてきかせう。

扱も頼朝の御しやてい九郎判官、平家をたいじの為に八嶋のうらへおもむき給ふ。当国かつうらに舟をよせ、さくら  
 まのたちをせめをとし、八嶋へのかどいで〈に〉せんとして、中々おびたゝしい事じや。さくらま此由をきゐて、より  
 〳〵若たうをあつめ談合をあそばされた。各々申さるゝハ、是ハめいたいしやうなり。其上ぶぜいなれば、ひとまつ  
 御ひき候へと申さるゝ。さくらまきこしめされて、いや／＼矢一すじいらでハかなふまじいとあつて、いそぎ御こし  
 らへじや、このよし皆々相ふれいとの御事じや 〈しか／＼〉  
 皆々うけ給り候へ、よりともの御しやてい九郎判官当国かつうらに舟をよせ、さくらまのたちを御せめ被成候。何も  
 年寄若きによらず、らうじやうつかまつれとの御事にて候。其分心得候へ／＼

∴ちびき

／＼御前に候 　／＼畏て候 　〈かくやへ〉 　いかに此内へ案内申候。是ハかさい殿よりの御使にて候。此所のちびきのい  
 しを、たこくへ引いだし、ちびに御わり有べきとの御事にて候間、いそぎ出ていしを御引候へ。たとへひんちよなり

とも此事そむき申ならバ、此所にハ、かなふまじいとの御事にて候。とふく御いであれとの御事にて候。皆々うけ給ハリ候へ。此所のちびきのいしを、た国へ引出し、ちゞにわりすて有べく候間、なん女（男）によらず、いそぎ出て、いしをひかれ候へ。其むね相心得候へく

（しかく。うたひありて、して、ことバに、わらハひとりして石をひかうと云時）何と此いしをかたゞひとりしてひかうずると御申候か。それに御待候へ。其由申上ずるにて候。いかに申候、あれに女の候が、此いしをひとりしてひかうずると申候。畏て候。こなたへ渡り候へ

∴高野あつもり

たれにて渡り候ぞ。しかく。何と、くまがへ殿のゆかりと仰候か。当山ハ、女人きんせいの御事にて候。ことに女性の御身にて御参候事いかゞにて候。しかく。畏て候。いかにくまがへ殿の人に御宿をまいらせ候に、せんそくとりてまいらせ候へ。しかく。御前に候。畏て候。いつもくまがへ殿ハ、をくのゐんへ御参候が、今日ハいまだ御参なく候間、あれへ御供申、引合申さうずるにて候。其時御たいめん候て、しばしの御物語候へ。其間それがしハ是にまち申さう

みなせ

〈おくに有〉

在所の者と御尋ハいかやうなる御用にて候ぞ。しかく。此所にをひて、ためよのきやうと申が御座候が、それハとんせいさせられ、いまハ高野に御ざ候。其御子になんし女子御ざ候が、かミさまハ七日さきに（死去）しきよさせられて

御ざある。御子たちの、まい日御はかへまいられ候。御用御座あらば、是に御ざあつてあわせられ候へ

さい い 〈これも右二有。よの本有〉

是はいづみの小大郎殿の御内にある者にて候。只今是へ出る事よの儀にあらず。たのふだる者、只今さいがわへ出らるゝに付て、それがしも出て候。其子細ハ、よりとも御かりに御出のおりふし、さいがわを御とをりあり、此川ハ、なにといふ川ぞと御尋ねあれバ、御まへの人々、さいがわと申げに候とこたへ給へバ、よりともきこしめし、其子細ハいかにと御申ある。さん候、さいと申者のすミ申によつてさい川と申よしうけ給ハリ候と申されければ、其すがたハ、いかやうなる者ぞと御申ある。さいと申者ハ、ちやうじやう(眞上)につの壺ついたゞき、すいちうをくゞれば水五尺わかれさつて、其身のはやき事、こくうをかけり、さながらとぶとりのごとくにて御ざある由申せバ、よりともきこしめし、さあらバ、かのつのをとつてもつならバ、水ハちゆふなるべきとおほしめし、すまんぎの中を御ゑらミあつて、いづみの小二郎を御前にめされ、さいのつのをとり申べき由おほせ付られ候。小二郎殿ハめいわくながら御うけを申され候へども、われゝの存るハ、水をちゆふじぎにつかまつり、ことさらはやきものなれば、なかゝつのをとる事ハなるまじきと存れども、たのふだる人の思召すむねあれバこそ、さういなくおうけを御申あれ。さりながら時のめんぼくよのきこへ、是にましたる事ハ有まじきと存る事にて候。何と申ぞ、只今さい川へ出られたると申か。か様の折ふしがせんにてある程に、たとへたのふだる人ハ御ともはいらぬとおほせらるゝとも、皆々よういをいたいて御ともにいでられ候へ。かまいて其分心得候へゝ

…さき 〈いひたて〉

／＼はゑんぎの御門につかへたてまつる者にて候。まことに此君けんなふにてましますにより、ふく風枝をならさず、たミとざしをさゝぬ御世なれば、しきをり／＼の御あそび数をつくし給ふ。ことに今日ハ、しんせんゑんのいけのほとりへ御ゆきあつて、ぎよゆふ有べしとの御事なり。其分心得候へく

がうま 〈よの本二有〉

／＼此しやくそんと申ハ、天竺かびらこくの、ちやうぼん大わうの御子にてまします。御名をバ七じゅうな太たいいと申、さらにはぼんげにあらず、御母ハ、まやぶにん。御たんじやうの時よりさま／＼のきずい御ぎ候。せいへい元年卯月八日に御たんじやうあり、七日と申に西にむかつて七足あゆミ給ふ。御あしのしたよりしつほうのれんげひらき出、ひだりの御手にて天をさし、右の御手を以てちをさし、天上天下唯我どくそん、さんぜかいぐう、がたうあんそくととなへ給ふ。十九の御としよりだんどくせんにおゐて出家し、仙人に仏法をさづかり給ふ。此せんにんと申ハ、ほんぢ、くわん自在わうぼさつのけしんなり。十二年の間、たきゞをとり、水をくミ、仏法にしゆ行ぎやうして、此たび中天ぢくまかだこくのうち、かな山のふもと、くわんぎじゆのもとにじやうざせき、またハさんぜどくそのんのがうざとも申、しやうがくせきとも申、此岩のねふかき事、此地より五百ぢゆんのした、ふうりんせかい、水りんせかい、くわりんせかいをねとして、ミつのいわのさき、あいわかれて、北のいわさきハしゆミせん、南の岩さきハふだらく、山中の岩さきハ此かな山、正覚せきなり。此うゑにしてへきちじやうぎやうをしき、五比丘を左右三立、東方にむかい、じやうだ

うし給ふを、<sup>(第)</sup>大六天のまわう、だいばだつた、<sup>(衆馬牛)</sup>ざうめごようのしくんまで、しやくそんじやうだうをとぐるならバ、<sup>(四軍)</sup>ひろく三界一切衆生を、こして、我らがきやうがいをこゆべきとて、まづ人間ハ、女人に心をうつす物なればとて、きらくきけんかつだい女と申すびじんをこしらへ、しやうぎやうをやぶらせん為につかわし給へ共、こくしやうろくさうをさとの仏なれば、なか／＼なんじらハげだうなり、そうべつ女人ハしつとの心どくじやのごとし。あるいハ、けんきよくにしていつわりをたしなミ、ほういつじやけんにして、さんほうをしんぜず。しばらくのたしなミにふけて、しゝつるぎのはやしにぎせん事を(二字分抹消)わす。かゝるげだうに心をうつさんやとの給へバ、たちまぢきめんとなり、きぶくして花をさゝげ、らいはいをしてさる。今日三月十五月初夜の時に東方にむかつて、かの正覚石のうゑに吉じやうざうをして、じやうどふなる。大六天のまわう及はずながら罷出、しやくそんに(以下ナシ)

∴せきはら　へうたひ、ことバ。心しづかに下らふするにて候

／＼かやうに候者ハ、せきはら与一殿の御内につかへ申者にて候。かたじけなくも、よりともしより、ミの、国中川のしやうを給ハつて、今日にうぶつかまつられ候間、ミなく／＼其分心得候へく

∴野　口　ワキ、ミちのくの衣川たかだちより出たる僧也。中人、夢のまゝにてまちたまへく

〈はじめ〉／＼野口の者と御たづねハ、いかやうなる御事にて候ぞ　／＼あれなる寺ハ、きやうしんじと申候。心静に御

一見候へや　／＼御用の事候ハ、重而うけ給ハリ候へ　／＼心得申て候(申入)

／＼さいぜんのおそうはいまだ是に御とうりうにて候よ　へしかく。せりふつね(ごとく)



去程によしともの御子、九郎太夫の判官よしつねハ、くらまのとうくわうばうにたくもんの為御ざ候が、かくもんにハすき給はず、そうじやうが谷へ御出あり、明くれひやうほうを御けいこなされ、平家をほろぼさん為に、おふしうへ御くだり候て、ひでひらをたのミ給ふが、ひでひらはて給ひて後に、ひでひらが子ども心がわりを任り、高だちのじやうへおしよせ、はうぐわん殿すでに御腹めされんとおぼしめす時、いづくともなく俄に城のうゑにくる雲一村たち来り、このはてんぐうに車(天輪)をひかせ、よしつねをのせ申、せつなが間にはりまのくに、この野口へ来り給ひ、是にて御出家あり、ぢひをもつはらとし、明くれかいだうにいで、上下のおもにをもち、年月送り給ひ、終に此所にてむなしくなり給ひ候を、各々寺をたてられ、毎年大念仏を申とぶらい申候が、はだの御守りに、よしとものばつし、九郎太夫はうぐわんと、けちみやくに御ざ候故、それよりはうぐわん殿としれ申候

〈せりふつねノごとく〉

し

ゝ

〈中人 おほへてうつゝと成にけりく。せりふつねノごとく〉

／＼そうじてだいしやう文殊のありがたき子細ハ、しよしうともに仏道しゆぎやうし給ひ、じやうぶつとくだつのゑんとなり給ふも、ことゝくだいしやうもんじゆの御はからいとうけ給ハリ候。それにより、ざんぜ(ざん)のがくもんとハ申候。又当寺の文殊しゝにめされ候故ハ、天竺にて、うでんわう、何とかし給ひけん、しゝを取はなし給ふ。然バ、しゝ、はいきをひのつよき物なれば、こくうにはなれ、行がたをうしない給ひて候。誠にしゝと申物ハ、かけいでんとする時ハ、ミのけ(毛)をたて、心も言葉も及ばずおそろしき物にて候。さるに依てきやうせつにも、しゝふんじんととかれたる由申。うでんわう取はなしたまひたる事をくやミ、天ぢくの事ハ申に及ばず、きらいかうらいまでもたづね給ひ、終にハ尋ねいだし給ひたると申。惣じて此所にをき候て(以下ナシ)

## ふじ

〈らんじやう〉是ハせんげん大菩薩に付<sup>(付)</sup>申末社の神にて候。然るに此ふじ山と申ハ、三国ぶそうの山にて候。それはいかにと申に、むかしもろこしより、ほうしと〔申〕者、此国に渡り、ふらうふしの薬をもとめん為に來り候が、いま又しやうめいわうにつかへ申者、此どに渡り、くすりをもとめんとて此ふじ山へ尋ね入候処に、大菩薩出給ひ、ことごとく御薬を、しへ御申候。ことに当山の御薬をぶくするともがらハ、諸病さつて寿命あんおんなる事うたがひなし。猶もごんげんかぐやひめ、御すがたをあらハし、ふじの薬をもろこしのちよくしにあたへ御申有べきとの御事に候。是から常の末社のことく

## ○鳥の舞

まづはるハ鶯の、軒ばの梅にねをなく、金鳥のほろ、ハ、春をつぐると覺へた、三月の始に鳥あわせの候。すななくびけふりたて、よつつのいつけやうたるハ、おもしろうぞミへたる、山路に日をくらし、しばほとゝぎすの一こゑ、秋ハまた、ことりが多く<sup>(おほ)</sup>渡るハ〔なに〜〕やまがら・ひがら・四十がら、なかをそつとミたれば、ハとりもちつとまぢつた、冬ハまた大雪にまぎれてミへぬしらすぎ、はく鳥も候、水にうかめるをし鳥の、こゑハきかねどおもしろ、いづれの鳥と申へともく、千年のとしをふる、つるのまひぞめでたき

## ○筆の舞

〳りようことを借用、様〴〵うつくしき、かミ一人の御事より、下万民の書札<sup>書</sup>まで筆之しらざる事なし 〳かんち  
 やうのさんきん、きしそくしちよすがうに、なをへざるも筆なり 〳我がてふにおひてハ、しやり<sup>佐理</sup>・かうぜい・たう  
 ふう、わかんに其名をゑたるも、筆之しらざる事なし 〳こうぼう大師の御名も五筆くわ祖<sup>？</sup>と申て、こうを入たり  
 〳あなかしく〴〵、けしやうぶミの御用も、筆のしらざる事なし 〳千石のせりやうも、万石のせりやうも、筆こそ  
 ハ納た

## ○かいのまい

〳春立雲のしるしとて、霞の間より桜がい 〳加茂の祭のあじろの下、すだれがい、近江へノ国なるからすがいも  
 候 〳色ハくろく候へども、心よしとてめさるゝ 〳野に伏山にをき伏山ぶしの、こしに付たるほらがい 〳何より  
 もめでたきハ、大将のげじにつくものゝふの、かけつ<sup>新</sup>かやいつたゝかう、あつはれよき大将やと、名を取がいぞ目出  
 度

## ○菊の舞

〳きくハ百菊へそのしなくへハおゝけれども、春のきくにとりてハ、桜菊に乱ぎく、たうくわぎくも咲へい  
 たり 〳夏のきくにとりてハ、ゑんていの菊にとふ、しつくわつこうぎくも咲たり 〳秋のきくに取てハ、あきめい

菊に太白、くちばむらさき色々　／＼冬のきくにとりてハ、こがねめぬきせうじやう、雨をおびたるぬれ菊、ゑんなう  
 ぎくもさいたり　／＼四きおりくをさきつれ、九月九日と申に、きくの酒となずけて、三、九度ものまふよ

皇の舞<sup>〔ほし〕</sup>

／＼あへかつきおきて空ミれば、ほしこそあまた見えたり　／＼七よう九よう廿八〔宿〕も、千万もきらめく　／＼七夕  
 びめに宿かりて、わう夜の空の物語、ほつしくと語らん　／＼しよくじよも牛を引やらん。からすきほしも見えたり  
 ／＼又山のはを見わたせば、しほめく皇も見えたり　／＼あか月がたの事なるに、一つのふしん候く　／＼すばるほしの  
 御かたえ、よばいほしがふしんな

○月の舞

／＼あら面白の初月や、弓はりがたといながら、まがつてかまのごとくな　／＼〔サテ〕又夏ハ山の井に、すゞしく見ゆる  
 月影を□ぶぞうれしかりける　／＼次デ、あかし、さらしな、ひろさハの月のきよあしの、ひかはい七日月、あうゝ物  
 八月への月かけ、何よりも見事なるハ、ならの都の猿沢の月ぞ面白　／＼実悦のつきせぬ、月の舞ぞめで度

○船之舞

／＼舟のおこりをたづぬるに、かんちやうのさんきん、くわてきといつしげきしんの、作りいだせるたくミ也　／＼筑紫

にハ松マツうらがた、唐〈コシ〉舟をいとわじ 袖ふる山のさよひめ 南にハ木之宮、行末もしらぬこいじに、たとへて是をよミけるハ、ゆらの戸渡る舟人 又ミちの国こくにも上川、のぼれバ下くだ（る）いな舟 君の舟ハれうどうげきしうといわふた

○鶉ウツラ舞

唯今のおさかなに、鶉一羽ゐんとて、弓とつてをしはり、田のあぜをねらふた あんのごとく鶉が、たんだ壺羽はうたり いでくれうぞ鶉よ あれほどの鶉に、弓も矢もいらぬぞ、手どらまへにしてくれう かしましいぞこどもよ、はねをぬいてとらせうぞ こぎにせよまつこせ ねらいよつてまいよつて、とらまへてミたれバ、きやうがつたうづらで、なきやうがちがうた なにと又ないたぞ ものと又ないたよ こきやろふとないたハ

○さけの舞

それ酒にはうゆうのとくあり 抑酒は百葉のちやう、葉の中の第一 仏せつ雪山さんの出し時、かんふうはげしかりしに、たミ、かすをあたくめて、仏に是をまいらする されバしわす八日（盃糟勢）のうんざうかいハ、此大かうをまなべり。かずだにもか程の、てうほう〈ニ〉まして、しんじつの酒ハ〈又〉言葉にもべがたし「しかく」 しやくそのの御弟子に、しやかだびくといつし人、だんなのもとに行、あまりにくくいりぼりし、いやしきていにまろびふし、ひる・かいるに身をすわれ、むくい（秘事）の程を見せしめんが〈その〉為に、おんじゆかいとてかたくいましめられたり 但かくすがひ（秘事）じぞかし。かくしてかいなきハ、あか身じやうごがせう（笑止）しな（二字抹消） 又ごつかん・ごくねつと

て、さむきくあり、あつきくあり。ごくねつのあつきにハ、いかにもせいしゆをひやしへつゝ、おなじくちやわんをひやしへて、三ばいハのミたらず、四はいは数わるし、五はいばかりのミぬれば、いかなるじゆんたんゑんそ、かうゑんといふとも、是にハマさり候ハじ、扱ごつかんの折節ハ、にごりさけがてうほう。かんの程をしすまして、三ばい四はい五六、七八はいのミぬれば、ひたるにあせハしりく、たるきのつらゝをとるまじ。かゝるめでたき酒のとく、是を見きかん人々ハ、いかに酒をよういして、したゝかにのむならバ、命とともにながもちの、さりゑいハにくミたまいそよ、是こそ酒のかうのしき、よくちやうもんへをし給へく

○ひるたる舞

正月のてよへうはいにハ、ゑぼし上下ちやくしへツ、ぶるいけんぞくあつまり、かれいのいわるをさめおく、ひきでものにとりてハ、ほうらいさんにたちばな、孫子につたふゆづりは、つち大こくのゑかいたる、あふぎなどを取出し、すゑはんじやうとも引たり、二月ハねはんの、さかのしやかに参て、きせんくんじゆ納めをく、中にもしやくそんの、つくくと御らんじ、浄土のはると引たり、三月ハ茶の名所、宇治やとがや、あさの茶、うすはひんな、なんはうす、おとハ松風さよあらし、さらくさつとも引たり、四月にもなりしかバ、まいひきにひまもなし、きりくにきりくにきつとも引たり、五月にもなりしかバ、あふみのくに、かただのあミと申ハ、ひるハ人めしげけれバ、よわにまぎれて引たり、六月ハぎをんのゑ、川のまつりも打過、山のまつりもはいかゝり、山ぶきの其下に、なり物にとりてハ、たいこ・かつこ・ふゑ・つゞミ、びやうびやうと、大きな山を引たり、七月にもなりしかバ、爰やかしこの山谷に、なるこなハをはへおき、ほうくからころくと、人もおわぬに引たり、八月ハ名月、爰やかしこの女郎どもがあつまり、いざやまめをひかんとて、ぬすミびきといふ物に、はしり引とい



打たりな 八月ハこまくらべ、まきより出るあら馬ハ、れんせんあしげ、さびつきげ、もちげ、あをげ、かわらげ、かうじくりげ、四つじろ、きんぶくりんのくらおかせ、ひようのかわのあをりに、さくのおぶミしかけて、いづもぐつわのしらみがき、がつしとかませてる時ハ、とねりがさいたるむちとつて、かけよ、はやめと打たりな 十一月になりしかバ、越後越中しなのに、大雪ふつて、そらはれて、いま若・さる若・中若ハ、かんぜきなんぞうつはいて、手ごろに雪をつくねて、お庭の松をかまへて、こびんさきをねらふて、おふつまくつ、うつたりな 十二月になりしかバ、大年、としこさんとて、大まめこまめはやいて、ほうらいさんより出る、おにのまなこをちやうど打ぬれば、かくれミのにかくれがき、打でのこづち、おもふたから打出て、ふつきの家とおさめた

…初 雪

いひたて 是ハ出雲国大社の神主殿の御内に、夕ぎりと申女にて候。さてもかんぬし殿これう人を御もち被成候が、誠にミめかたち人にすぐれ、やさしき御心ばへならびなき御かたにてさぶろふ。さる間、過しとし、有人庭鳥の子を参らせられて候が、しら鳥にていつくしく候へバ、ことの外御てうあいにて、名をはつ雪と御付なされ、あさ夕もてあそび給ひ候。今朝ハいまだ見え候はぬほどに、とやをあけて見ばやと思ひ候 問女 や、さてもにがししい事かな、この鳥は、なくなりて候ハいかに。さて是ハ何と申上候べき。さりながら申候はでハかなふまじく候間、まつすぐに申さばやと思候 問女 いかに申上まいらせ候 同 はつ雪がむなしくなりて候 同 中 なくなりて候。そと御覧候へ しかく有て、うたいに。 〈うたい〉 みだのちかひを頼ミつゝ、とぶらふならバこの鳥も、なかごくらくのうてなのえんとならざらん そく女して いかにゆふぎり 問女 御前にさぶらふ そく女して 一七日上らう達をあつめ、とりのとぶらいをせん、といふ 問女 まことにいたはしき事にてさぶらう間、さやう



にあそばされ候へ。上らうたちをかたらいて参りさぶら(は)ん 問女\いかに上らう達へ申。はつ雪(が)とぶらひに、姫君の御つば(へね)にて、一七日の念仏をなされ候間、御いでありて給はれとの御事にて候。その分御ころへ候へや 問女\いかに申、とのくの上らうたちの、御よりありて候。一七日の念仏を御はじめ候へや

…俊成忠則 〔山しろ〕

〔わき、しゅんせいのみきやう也。同道して問いづる〕 〔おかべの六弥太出て、名乗て〕 六弥太\いかに安内申候 〔とも、あい。としなりの内のもの〕 \あんないとハ誰にて渡り候ぞ 六弥太\さん候。おかべの六弥太が参りたる由御申候へ 問\かしこまつて候。さあらばしばらく御待候へ。そのよし申上げうするにて候 六弥太\心得て候 問\いかに申上候。をかべの六弥太たゞずみのまいられて候 俊成\こなたへと申せ 問\かしこまつて候 同\御いでのよし申て候へバ、こなたへ御とをりあれとの御事にて候。かうく御まいり候へ

…身賣

して\いかにせんどう殿に申候 〔問、せんどう也〕 \せんどうとはいかやうなる人にて候ぞ して\それにあき人の御いり候ハゞ、人やめすかと御といあつて給候へ 問\心得申て候 同\いかに商人たちへ申、人やめすかと仰候が、御かい有べきか わき\かひ候べし。舟(をよせて)給り候へ 問\心得申て候 わき\人うらんといふものはいづくに渡り候ぞ 問\あれに立たる人にて候 \しかく 問\日本一の追手がをりて候。あき人たちへ申さう 問\いかに申、追手が吹候。急舟にめされ候へ あい\いやくまつ事なるまじく候 問\さあらバ

随分御急候へ 同いやくるいせんハことくく出て候よ。我らが舟までにて候 同いかに申、余の舟ハ皆々出て候。我らが舟までにて候。いそぎ御のり候へ 又またち候て、してにかさをきせて、たち候とき、刀をぬいて、したにをき、さほをとりにて立也

…みなせ

あい／在所のものと御尋ハ、いかやうなる御用にて候ぞ さればためよのきやうと申たる御かたハ、いにしへこの所に御ざありたるが、何と申たる御事やらん、とんぜいめされ、今ハ此所に御ざなく候により、御らんぜられ候ごとく、かやうのていになり申て候。又その御子に、男子も女子も御ざ候が、御母子ハ、この七日さきに死去せられて候。なんぼういたはしき御事にて候ぞ。若其御子達に御用の事あらば、毎日御はかへまいらせられ候が、いづれもこのミちを御通り候間、是に御待あつてあはせられ候へや 御用の事候ハ、かさねて承候へ 心得申て候

…岡崎 山しろ

わき、都のにし、大原小塩の明神につかへ申神主。わき出て名乗、花の番の事申付候也。

わき／いかに誰かある 間御まへに候 わき／いつものごとく花の番をよく仕り、一枝もおらせ候な あい  
／かしこまつて候。猶もそのよしふれ申さうずる

間／皆々うけ給り候へ。ふれ申におよばね共、神前の桜むかしより手折候事きんぜいにて候間、をなじく当年も一枝をり候事も、かたくきんぜいにて候。それがし承て番をいたし候ぞ。其分心得候へ／

花見のともがら、一せいにて出て、うたいに。 はなミ衆 大原やをしほの山に着にけりく 同花見 いかに神前の人の渡り候か 間 神職のものといいかやうなる御用にて候ぞ わき 少人をはじめて花見に御伴申て候。なぐさめて給り候へ 間 尤にて候。花見のともがらおほき中に、是なる少人ハ、べつして御しやうぐわんと見え申て候程に、一さしまふてなぐさめ申さう わき花ミ それハちかごろにて候。やがて御まひ候へ 間 かしこまつて候 間 うたいてまふ。花をふんでハハをなじくをしむせうねんの、春の夜もしづかならでさはがしき、御よし野の、山かせにちる花までも、をいてのこゑやらんと、あとをのミ御よしの、おくふかくいそぐ山ぢ哉 是をまふ也。此まいをまいをさむると、少人、いかにたれか有と、立衆をよび出す也

## 木 賊

わき、都方のそう。信濃国の人なるが、をさなき時、都方のそう、ひろいて、しなのゝもの、ちゝにあひたがりにまゝ、マダ 懸しなのにつれてくだる也。さて、わき、しなのち、そのはら山に付て、しての老人、つれをとこつれて、とくさがりに出て、しばらくうたいもんだいありてして、いかにおそう達に申候。われらがすみかハたなくわにて御入候。一夜をあかして御通り候へ わき あらうれしや候。さらバ参らうずるにて候 つれをとこ成共、あいなり共いふ いかにかに御そう、御心やすく御さ候へ。今のぜう殿ハ、少身におもひありて、時々うつゝなき風情の候。其時ハ心得て御あいしらい候へや これから、してと、しばらくことばありて して、いかにたれか有 間 御前に候 して、御さかづきをまいらせ候へ 間 かしこまつて候

## ふたいぼく

わき 長門国あふのこほり、くわんをんだうの住僧也。ほんだうこんりうに、太木をなをさする也。

いかに誰かある 問、のうりき御前に候

わき本だうのむな木に、北谷の大杉をなをせと、そまどもに申付

候へ のふりきかしまつて候

いかに杣人、あじやりの御でやうには、ほんだうのむな木になさるべき間、北

谷の大杉をなをされ候へとの御事なり。その分心得候へく

しかく。きのせいとそまと、もんだう有て、うたいに。しかく。つばさとなりあがりて、雲をわけてとんでゆく、たつ雲をわけて飛で行。是中入也。

のふりき言語道断おそろしき御事にて候。まつ此よしをあじやりへ御申あれかすとぞんじ候 そまげにふあま

りにきどくなる事にて候間、今の有様を、ともくあじやりに申さうするにて候

そまいかにあじやりに申候。

北谷の大杉をなをしに立寄て候へハ、木のせい出て、いにしへも此木ハきられず候間、今御きり候ハ、きどくをミせ申さうずるとて、けしやうと成て、こくうにあがりて候

のふりきいやたゞよのつねの事にてなく候。そのうへ

あじやりの命をも、又みなくの命をもとらうずると申て候

## 大原御幸

やましろ。

〈珍敷間之本ノ内ニ有〉

わき 後鳥羽院の臣下出て、名乗有て

臣下いかに誰かある

問御前に候

しんか大原へ御幸被成候間、道をつく

り、そのきよめをも仕候へと申候へ

問かしまつて候

同皆々承候へ。おはらへ御幸なさるべきとの御事

にてあるぞ。ミな罷出て道を作り、其清めをも仕れとの御事にて候ぞ、其分こゝろへ候へく

…俊 寛 さつま

わき、平のしやうこく入道清盛の御内の人。きよもりの御むすめ、高倉のきさきにたて、あんとく天王を御はらみ候て、御さんの御きたうの為に、国くゝの流人しやめんある。

わき出て名のり、太こうちのはたへりて、さて、たんばのせうしやうなりつね、へいはんぐわんやすより入道と、二人出て、うたい有て、さて、しゆんくわん一せいにて出申候也。しゆんくわん、して也。して出て、三人いろくもんだい有て、うたいに、物おもふ時しも、今こそかぎりなりけれといふ。うたい過て笛吹のもとになをる。三人とうどなをりて、笛ひしぎて一せいなり。其一せいうち出すと、間しらいするもの舟を持ちて出て、江口の舟のをき所にすぐをいて、舟をおきてから笛ひしぎ候事も有。二せつ二有

ことバ、間一だんの日よりにて候、いそぎ舟を出し申さうずるにて候 間、わきにいふいかに申候。おいてがふき候。いそぎ舟にめされ候へ わき心得て候 間、わきの乗る間に一だんの御しあわせにて候。今日のやうなる追手ハまれに御ざ候 うたいのつめに、きかいが嶋ならん あいいかに申候。御舟が付て候。是こそきかいが嶋にて候へ。御あがり有てるにんを御尋候へ わきあがりてから 間まづさらば舟をつなぎ申さう といひて、ぶたいのさきに、よこたをしに、舟のつなをくく也。はて、から舟を、あいをい、たる者持てはいる也

…元服曾我 さがミ

ワキ、箱根の別当。すけなり、次第・道行過て すけなりいかにたれかある とも御前に候 すけなりそれがしが参り

たるよし申候へ とも／かしこまつて候 同／いかに案内申候 能力／案内とハたれにてわたり候ぞ 友／すけ  
 なり御見廻にまいられて候 のふ力／なにと助成殿の御まいりとおほせ候か。その由申上候べし、しばらくそれに御待  
 たらふするにて候 友／心得申て候 のふ力／いかに申上候 同／すけなり殿の御登山にて候 同／中／の事  
 同／かしこまつて候 同／いかにさいせんの人わたり候か 友／是に候 のふ力／其よし申て候へば、こなた  
 へ御出なされ候へ、御めにかゝらふすると申され候 友／心得申て候 同／其由申て候へば、こなたへ御通あれ  
 との御事にて候

しかく過て ワキ別当／いかにのふりき 能力／御まへに候 別当／すけなり殿に申べき事の候を申おとして候間、  
 汝ハおつかけとめ候へ 能力／畏て候 同／はやばつくん御出あらふする物を、いや是に渡り候 同／いかに  
 申候、別当これまで御出にて候 同／かしこまつて候 同／こなたへ御出候へとおほせられ候

…はるちか

はじめ、狂言、大口・ひたゝれ・なしうちきて、ともをつれ出る也。なのり

狂言せう／是ハかまくら殿の御内にありし者にて候。扱もそれがしがむこをば、いそやの十郎はるちかと申候。さる  
 しさいありて身をかくし候を、それがしか、へおき候処に、かまくらどのよりいそぎめしとつてまいらせよ、その儀  
 にてあるならば、御ほうびなさるべきよしおほせくだされ候間、やすく／と御うけを申て候。太郎二郎に申付、とら  
 せばやと存候。いかに誰かある

あい／御まへに候 せう／太郎二郎をよびてきたり候へ あい／かしこまつて候。やらせうしや、御めんしよくか  
 ハつて候。太郎〈殿〉二郎〈殿〉をよびてまいらうするにて候 かくやへむいて いかに太郎殿二郎どの、せうど

の、めしにて候、いそぎ御出候へ

太郎二郎はしがり。ワキ／何事のわけを存せず候か あい／いやわけをば存せず候。いそぎ御出あれとばかり御申候

／心得て候。それへまいると申せ かしこまつて候。太郎殿二郎どのの御参りにて候 せう／こなたへきたれ

と申せ あい／かしこまつて候。こなたへ御出あれとの御事にて候

／いかに太郎二郎、かまくらより飛脚たつて、いそやの十郎はるちかハ、てうてき御殿の事なれば、いそぎめしとつてま

いらせ候へ、御ほうびあるべきとの御事にて候間、御うけ申て候。いそぎめしとり候へ ワキ／是ハおほせ共おほ

へぬ事かな。さぶらいがさぶらいを頼にさへあるべきに、ことさらむこの事なり、たとへともに迷惑仕る共、同心ハ

申がたく候 言語道断マズのことを申ものかな。我等いつたん御うけを申てあるに、かた／＼はがつてん仕間敷候か

ワキ／扱二郎なにとあるべきぞ つれ／御りやうじやうあるうへは、談合にをよはず候。めしとつてまいらせ候へ

／近此よく申てある。けなげものにて候。扱此うへにても太郎ハいやにて候か ワキ／いつたん義理きりをば申つ。お

やのおほせをそむくべきか、めしとつてまいらせうずるにて候 がつてんなればよいぞ。あまた人をそへ候べし。

大かう御の者にて候間、とりそこなわぬやうに仕候へ いや、くるしかるまじく候。是までよびこし、兩人してと

り候べし 扱／あゝもつたいなや、あの大かうのものをとりそんじてあるならば、このせうがくびも、太郎二郎がく

びをも、ねぢくびにいたさうずるぞ。五里も拾里もよそにてとり候へ かしこまつて候

／しかく。 なハをかけて、がくやへ入候時、まへのあひしらい 扱／あゝとつたぞく。申すくマズとつて御座る 道成寺などの

間のことく 扱／何じやくく 扱／きもつぷす いやとりすまして候 扱／爰なうろたへめが。しづかにいひおらいで、そ

れがしにきもをつぶさせた。扱とりすまいてあるか 中く／とりすまさせられて候 扱太郎二郎ハおくしてと

りかねたるか、けなげにあつて取すまいたか 一だんとけなげにござあつて、とりすまさせられて候 扱／なにと

してとつたぞ 扱／その事にて候。まづ御兩人あれへござあつて、はるちかどのの御内に御座あるかと仰られて候へ

ば、中くうちにも申候、扱唯今はなにのための御出ぞと、ふしんめされた所に、太郎どの、いやくるしからぬ事にて候、われらに御きづかひは被成まじい、せうどの、御用があつて、御つかひに兩人参たると仰られて候へば、大かうの人にて、何の御用に御つかひとハおほせ候ぞと、ふしんめされ候処に、二郎殿の御心マコきしにて候ぞ、いや御用とても別のしさいにてもなく候。はるちかどの久しく御座候へ共、なぐさめ申事もなければ、ちや事コトもいたしてなぐさめ申さうずる、さあるにをひてハ、せうどのが、とうは頭はじめをいたし、来とうを春近殿へさし申さうずるとの御事にて候。則たゞいま御供申候へとの御つかひと御申候へば、春近殿、用の事御座候へ共、なぐさみかうをめされ、らいつをそれがしに御さし被成候ハんと承を、まいらねば、手前をぬくるやうに候間、御供仕参候ハんとて、御出あるが、その時御ようじんにて、まづ太郎どの二郎殿さきへ御出候へ、まづくとしてしばらく御じきを被成たるが、御用心と見えて候程に、太郎どの、さあらば我等さきへまいらふずるとて、さきへ御出候へども、はるちかハ、二郎殿もさきへ御出あれと仰られ候へば、二郎どの御り和根こんにて、いや太郎どのまいられて候間、われらのまいる所で御ざないと御申なされた程に、さあらばまいらんとて、はるちかどのハ、太郎殿の跡に御ざある、二郎殿ハ春近の跡にござあつて、御兩人の中にとりこめて、御おきあつて、ミちすがらはるちか殿のおほせには、さぶらひのかやうに頼る申うへハ、さだめて御心がハリはあるまじいと存、心やすきとてうちとけて御物がたり被成た処に、二郎どのの、跡より、がつきめと　　あ、おそろしや　　扱く、せう殿ハおくびやうに御ざある。太郎二郎殿ハけなげに御ざあるに、今のご系にておどろかせられたハ、ふしんに御座ある　　太郎や次郎やなどがけなげなハだうりじや。あいつめらは、は、ぞんぢやほどに　　さやうにおほせられ、だきつかせられた処に、太郎殿たちもどつて、おぼへたかとして、御兩人して御てごめ被成た所を、それがしなわをかけて、そのまゝかまくらへやりて候間、御心やすくおぼしめされ候へ　　それハようしてあれども、今ハいたハしい心があるハ。玉若ハなにとあるべきぞ　　玉若どのハいとけなく候間、それまでの御さたござなく候　　おやの事ハともあれ、玉わかを猶くかハいとおもふは



あい、たつて、何と玉若殿をもしまめてかまくらへ参りたると申か、それハにがくしい事じや、そのよし申さう。いかに申、たまわかどのをもめしとつてかまくらへまいりたると申、なれさてそれはかわいやく。何としてよからうぞ、とかく玉若ハいとけなきものの事にてある間、ついてゆくもの共に、よくいたわつてくれいといわう物を。何としてよからうぞ、あゝ玉若までめしとられ候ハ、はるちかの事をも御うけを申まじひものを。くやしい事仕たものかな。あゝ玉若かはいやく、なき人せ

∴ あやのつゞみ、いひたて 但いらぬ事も有

是ハ筑前の国、きの丸のくわうきよに仕へ申者にて候。扱も此所にかつらの池とて、めいちの候に、いつも御幸なされ候。去程にこゝに、にわはきの老人のごさあるが、いか成おりにか、にようごの御すがたを見たてまつり、しづ恋となり候を、かたじけなくも君きこしめし、こひハ上下によらぬものなれば、彼池のかつらの木の枝に、あやにてつゞみをはり、いろどりかざり、かけおかせらるゝ。此つゞみをうたせ、なりたらバ、こひをかなへ御申あるべきとの御事にて候。つねのつゞみさへ、うちつけぬものゝつハならぬに、ましてや是ハあやにてはりたるつゞみなれば、なることハあるまいが、彼老人がむよのこひをやめさせ御申あるべきとの御はかりごとかとぞんずる。かやうのことハめづらしきことにて候間、我等も見物申さうずるとぞんずる。もし、らう人よびいだす事もあり

∴ さうしあらひ

ワキ、只今の歌をきみて有か

中く、よくきひてござある

何ときひて有ぞ

歌、まかなくも、何をたね

とてふりづるの、はたけのうねを、まろびころびありくらん、ときひて候

…ゑぼし折

／＼なふいそがしや。ミなく承り候へ、くらまの寺にござ候うしわか殿、こんやあづまのかたへ御下向のよし、平家きこしめし、此うしわか殿をとめ申ものならば、くんこうハこうによるべしとの御事なり。かまひて其分こゝろへ候へく

うしわかゑぼしやをたづぬる　／＼此所のものとおたづねハ、いかやう成御用にて候ぞ　／＼あれに見へたるもがりがきの

内にて候。御用あらバあれへ御出候へや

〈四五人も、すつはのいでたちにて出て〉　／＼きゐたかく　／＼何事ぞ　／＼ミやこにかくれもなきあき人、三条の吉次

兄弟、こんや此しゆくにつゐた　／＼それハきくおよふだかねあき人じやが、此しゆくにとまつたといふか　／＼中

く　／＼それこそよひとり物よ。おんでもなふとらう　／＼中くとりそんずる事でハないぞ　／＼ミなくざつと

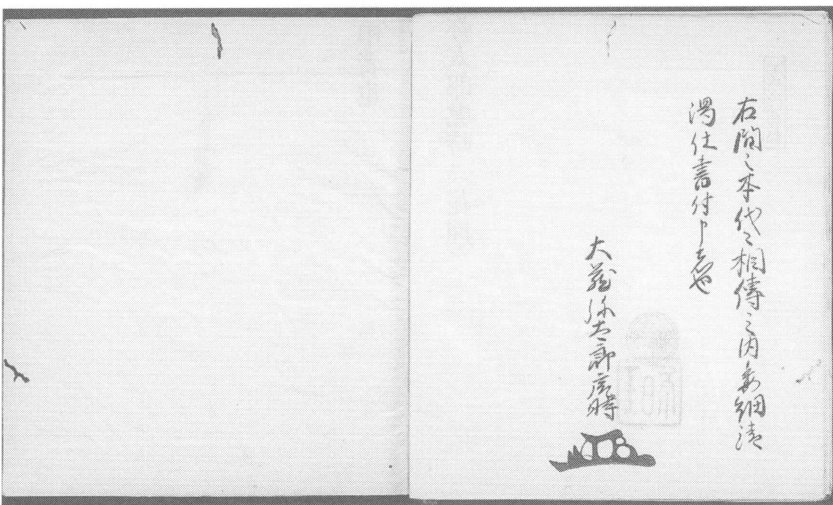
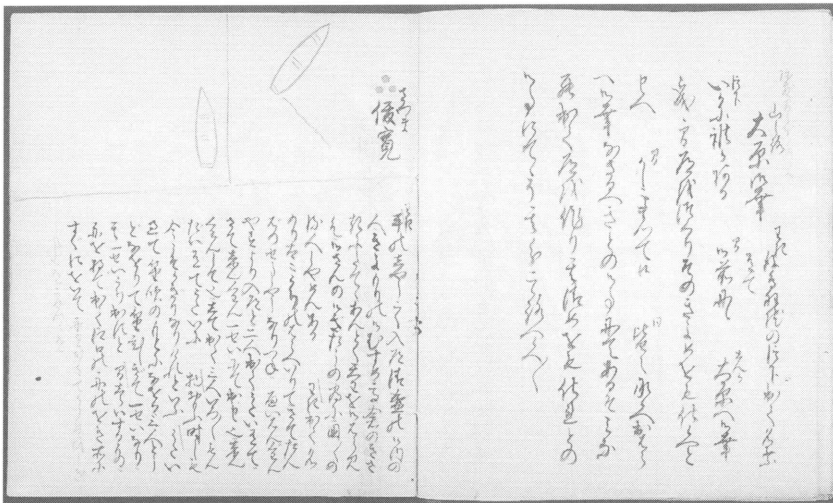
すんだ事じや　／＼まづこれをあてにして、いざ酒をのまふ　／＼いやくちこくがうつる。いそいで夜打をかけう

／＼もつともじや、さらバことへわたしめ

れんがぬす人などのごとくしのふで、たいまつを三つもちていで、うしわかになげつくる。一つハきつておとし、一つハふみけし、一つハとつてなげかへす。そのうち、きるまねをする時、あゝかなしやくといふて、きられたていして、一人かたにかけてにげ入候也

右間之本代々相傳之内委細清濁仕書付申者也

大藏弥太郎虎時（花押）



[Summary]

## Report on Ai Hayashimai

ODA Sachiko

Ai Hayashimai is a book on *kyogen* in the collection of the family of Yamamoto Tojiro of the Okura School of *kyogen*. It is assumed to have been written personally by the *kyogen* actor of the early Edo Period, Okura Tora'akira (1597-1662). Although the exact year is not clear, it is thought to have been written around 1633.

The book contains texts for 31 *ai-kyogen* (parts of *noh* played by *kyogen* actors) and lyrics for 12 *hayashimai* (short dances with songs played by *kyogen* actors). Tora'akira is also known to have edited 4 books entitled Ainohon containing texts for *ai-kyogen*. The texts included in Ai Hayashimai are not found in Ainohon. For that reason, the book in question is a very important material for studying *ai-kyogen* of Tora'akira's time. The 12 *hayashimai* are also compiled in Yorozu-atsumerui (writings on *noh* and *kyogen*) by the same author.